

二〇二三年度 中学 帰国生入学試験問題

国語 (60分)

〈注意〉

- (一) 開始のチャイムが鳴るまで、この冊子を開いてはいけません。
- (二) 問題は1ページから5ページに印刷されています。
- (三) 受験番号と氏名は解答用紙①および②の定められたところに記入しなさい。
- (四) 解答はすべて解答用紙①および②の定められたところに記入しなさい。

受 験 番 号			

I

以下の設問に答えなさい。

【問1】 次の①～⑮について、――部のカタカナをそれぞれ漢字に直しなさい。また、⑯～⑳について、――部の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

- ① 市役所のチヨウシヤを訪^{おとず}れる。
 - ② ツキナみな表現で詩を書く。
 - ③ 研究所をソウセツする。
 - ④ 資料をサツシにしてまとめる。
 - ⑤ 気温がコウカする。
 - ⑥ マイキヨにいとまがない。
 - ⑦ フンキして勉強する。
 - ⑧ 会議に向けてフクアンを用意しておく。
 - ⑨ 容器をミツペイして保存する。
 - ⑩ ジタともに認める。
-
- ⑪ 若者の意見をダイベンする。
 - ⑫ 月面をタンサする。
 - ⑬ 立ち入り禁止クイキ。
 - ⑭ 絶大な人気をハクする。
 - ⑮ 趣味とジツエキをかねる。
 - ⑯ 大変重宝する。
 - ⑰ 無理は禁物だ。
 - ⑱ 勉強時間は正味二時間だった。
 - ⑲ 祖母は大往生だった。
 - ⑳ 郷里を訪ねる。

【問2】 次の①～⑤の慣用句について、に当てはまる語を（ア）～（カ）の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

また、その意味として適当なものを（キ）～（サ）の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

慣用句

- ① おなじ穴の
- ② ふくろの
- ③ の子
- ④ ごっこ
- ⑤ につままれる

語

- （ア） とら
- （イ） いぬ
- （ウ） きつね
- （エ） むじな
- （オ） ねずみ
- （カ） いたち

意味

- （キ） お互^{なが}いに同じようなことを繰^くり返^{かえ}し、決着がつかないこと。
- （ク） 別のもののようにみえても、実は同じことのたとえ。
- （ケ） 事情がわからず、ぼんやりすること。
- （コ） 大事にしているもののこと。
- （サ） 逃^にげられない状態のたとえ。

II

次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

生物や社会科の授業で、生徒たちは「人間は集団生活を営む動物である」と習います。動物の世界で言うなら「群れ」を作って生活するということです。群れを作る動物と言えば、サルや象、イルカなどいろいろな動物が浮かびます。彼らは群れをなしながら、協力し合って餌を見つけ、外敵から身を守り、ねぐらを確保しています。個々の役割が決まっている群れもあるようです。もし、群れの中に、一匹でも群れ全体の利益を無視し、自分だけの利益を追求するようなのがいたらどうなるでしょうか？ もはや群れは成り立ちません。それどころか、彼らは群れで生活するからこそ生き延びてこられた動物たちです。この先、「絶滅」ということも十分にあり得ることでしょう。

人間の生活も同様です。それはほかの動物以上です。役割を分担し、お互いができないことを補い合うことでいまの生活が成り立っています。昔ながらの言い方をすれば、「お互いさま」ということになります。労働と社会、そして人のありようを考えると、この「お互いさま」の感覚を持つことが、これからはますます重要になってくると、僕は思っています。

現代社会で起こっている問題の中にも、「お互いさま」という気持ちがあれば解決に向かうものがたくさんあります。戦争などはその最たるものです。経済面に限定しても、多くの企業や個人が、「自分だけ」とか「一人勝ち」という考え方で利益を追求する姿が目につきます。

経済がグローバル化し、世界規模でものごとを考えなければならなくなってきているいま、「自分だけ得をしよう」という発想は古臭い考え方と言っているでしょう。経済は循環してこそ発展します。限られた資源を有効に活用し、豊かな生活を維持してゆくには、地球に住む一人ひとりの生活にゆとりがなければ不可能なのです。貧しい国、余裕のない国が増えれば増えるほど、環境に配慮した生活をしたくてもできない人々が増えてゆきます。われわれは、もはや地球族という群れの一員なのだと自覚しなければなりません。

せん。少数のわがままな行動が、群れを絶滅へと追いやるかもしれない、そんな状況にまで来ているのではないでしょうか。

ちよつと話が大きくなりました。もう少し、卑近な話に戻りましょう。

「お互いさま」という言葉は、別の見方をすれば、「自立」を意味する言葉になります。「お互いさま」というのは、自分でやれることは自分でやり、できない部分は協力して助け合おうという姿勢で人と付き合う態度のことです。これはまさに「自立して生きる」こととまったく同じです。

この「お互いさま」の視点で現代社会の「労働」問題を見直してみます。教科書的に言うと、「労働」は有償の「職業労働」と無償の「家事労働」に分類されます。そこに別項目として「ボランティア労働」が付け加えられることもあります。でも、「群れで生活しているわれわれを支えるために営まれる行為」＝「労働」と考えれば、職業労働にしろ家事労働にしろボランティアにしろ、どれも大切な労働であって、そこにはなんの優劣もないことがわかります。「みんなで社会を支え合っている」現実があるだけです。

むしろこれから問題になってくるのは、働く意欲も、また社会へ貢献したい気持ちもあるのに、それを活用する場を、経済情勢によって社会の側で用意できないことでしょう。群れが、群れとしての能力を最大限に生かすためには、社会を構成するメンバー一人ひとりが、持てる力を最大限に発揮できる状況や場があることが大切なのです。

労働を通じて、社会にしっかりと参加・貢献できているという感覚が持てれば、群れを作る動物であるわれわれは安心して生きていけます。社会の平和や安定にもずいぶんプラスとなります。現実社会を見ると「孤立感」＝「群れからはみ出た感」がもとになって起きているのではないかと思える犯罪が増えてきているように思いませんか？

つまり、「お互いさま」という関係が成り立つのは、各自が「群れに参加している」「参加できている」ときであり、「自立」もまた社会参加という文脈の中でとらえる必要があるということなのです。現代社会では、「労働」を取り巻く問題が山積していますが、その多くは「労働の孤立化」や「労働は個人的な営為だ」という現代的な感覚から生じているような気がしてなりません。かといって簡単な解決方法がすぐに見つかると思えませんが、僕たち一人ひとりが働くということの意味をもう一度とらえなおすことで、

周りの人との関係性を少しずつでも「お互いさま」感覚に近づけてゆくことで、時間はかかっても少しずつ働きやすい労働環境、住みやすい生活環境に変えていけると信じています。

世の中を見渡せば、儲けることより人との関係性を豊かにすることを優先して、物を作ったり、商売をしたりしている人たちも、若い人を中心に少しずつ増えてきているようにも思えます。僕は自分の生徒たちの中から、一人でも多く「お互いさま」感覚を持って労働市場に出てゆく人が生まれて欲しいと期待しています。

【問1】 この文章を一〇〇字程度で要約しなさい。

【問2】 この文章を読んであなたが考えたことを、四〇〇字程度で書きなさい。

【出典】 南野忠晴『正しいパンツのたたみ方』（岩波ジュニア新書、二〇一一年二月）一一八～一二二ページ

